

書評論文

翻訳亦楽しからず乎

—石田雄『日本の社会科学』独訳について

三島憲一

ドイツ学会会員として、ドイツ語にもよく通じておられる本学会誌の読者は、以下の日本語をどのようなドイツ語に訳されるだろうか。

「社会科学の名を独占したマルクス主義が度重なる弾圧と転向によって壊滅したときに、そのあとの空白をうめるかのように知識人たちの注目を集めたのが、近衛文磨のブレン・トラストの集団と信じられていた昭和研究会の人たちの発言であった。」(136)

とりあえず、恥を恐れずに、小生の試訳を記してみよう。申し添えておけば、この訳は推敲に推敲を重ねたものではなく、とりあえず思いつくままに、とはいえ原文を尊重しつつ、いわゆる「原書講読」式に書いてみたものである。

Nach dem durch die wiederholte politische Unterdrückung und die weltanschauliche Umkehr vieler Kommunisten is her verursachten Zusammenbruch des marxistischen Denkens, das eine Zeit lang die Monopolfunktion für die Sozialwissenschaften ausgeübt hatte, waren es nun die Meinungsäußerungen der Mitglieder des allgemein als Beratergruppe Konoe Fumimaros angesehenen Shōwa-Studienkreises, die die Aufmerksamkeit der Intellektuellen auf sich zogen und damit die Lücke ausfüllten.

ドイツ語としての多少のぎくしゃくは承知の上で、これまでのドイツ語から日本語への多くの翻訳のやり方を、方向は逆になるが、踏襲してみた（一応日本語も分かる経験豊かなドイツ人に、「文体は良くないがこれでも一応OK」との確認をとってある）。実際これまでのドイツ語から日本語への翻訳は、ドイツ語の一文はひとつの世界であり、それは同じように日本語の一文章にしななければならないという暗黙の前提があったように思われる。ピリオドとともに世界が終わるとする理解はもちろん、現実には柔軟に運用され、どうしてもうまく文章が作れない時は、二つにも三つにも分けていた。しかし、それは「仕方ない」からであって、基本的には一文＝一文の原則はおおむね堅持されていた。ドイツ語のピリオドやコンマが時代ごとに異なった論述上の機能を持っているだけでなく、現代においては日本語の句読点とは多くの点で機能が異なることは、ある程度認められてはいたとしても、「渋々」承認されていただけである。

私のこのお粗末な、多かれ少なかれ直訳調のドイツ語を見て、昭和研究会あたりの事情にも詳しい大阪大学のヴォルフガング・シュヴェントカー氏は次のように訂正してくださった。

Die permanente politische Unterdrückung und weltanschauliche Konversion führten zum Zusammenbruch des Marxismus, der die Sozialwissenschaften dominiert hatte. Die dadurch entstandene Lücke füllten die Äußerungen der Mitglieder der Shōwa-Forschungsgruppe aus, die als Beraterkreis Konoe Fuminaros galt. Ihr galt foran das Hauptaugenmerk der Intellektuellen.

なんとも明快ではないか。それでは次に、この書評論文の対象であるヴォルフガング・ザイフェルト氏の訳文を書き写してみよう。

Lange Zeit hatte der japanische Marxismus den Anspruch erhoben, nur er repräsentiere die Sozialwissenschaft. Nach seinem Niedergang als Folge staatlicher Repression und der Konversion so vieler Anhänger waren es nun aber die öffentlichen Erklärungen der Mitglieder der Shōwa kenkyūkai, welche die Aufmerksamkeit der Intellektuellen auf sich zogen, weil diese Vereinigung imstande zu sein schien, das entstandene Vakuum zu füllen. Man sah in dieser Gruppe eine Art *brain trust* des Premierministers Konoe. (202)

先に挙げた拙訳は、このドイツ語はいっさい見ずに作ったものである。シュヴェントカー氏とザイフェルト氏のふたつのバージョンは甲乙つけがたいが、いずれにせよ、私のそれと比べれば、読みやすさは歴然としていよう。

ザイフェルト氏は、著者の長い一文を丁寧に裁断して、その上で、全体としてよく纏まるように縫い合わせておられる。そして「日本のマルクス主義」「近衛首相」というように読者の便宜を図った「説明」を巧みに入れている。もちろん厳密には近衛に「首相」をつけたのは問題である。「昭和研究会」は1933年中に非公式に発足していて、近衛が首相になったのは1936年だからである。しかし、こうした細かいことはどうでもいいたろう。多少気になるのは、ニュアンスの広い、しかし、「公的宣言」の意味合いが強い öffentliche Erklärungen を「発言」の訳語にあてていいかどうかぐらいである。シュヴェントカー氏の場合も、翻訳の仕方は基本的には同じで、ドイツ語としてきわめて読みやすい。

翻訳の下敷きになっている「原書」は石田雄『日本の社会科学』(1984年、東京大学出版会)であり、この書評論文の対象は、同書の翻訳 Takeshi Ishida, Die Entdeckung der Gesellschaft. Zur Entwicklung der Sozialwissenschaften in Japan. Herausgegeben und aus dem Japanischen übersetzt von Wolfgang Seifert, Frankfurt A. M., 2008 (Suhrkamp Verlag, Edition Suhrkamp 2191) である。原著のタイトルに近い副題の Zur Entwicklung 以下は表紙にはなく、扉についている。表紙にあるのは原

著とは異なるタイトルだが、それは原著の94頁（翻訳の141頁）に吉野作造における「社会の発見」を論じた飯田泰三の言葉の引用に依拠したものであろう。

1992年以来ハイデルベルク大学の日本学教授として「近代日本の社会と歴史」部門を担当しているザイフェルト氏は、ご存知の会員の方々も多い。専門は、日本の労働運動や政治（学）である。博士論文の *Nationalismus im Nachkriegs-Japan. Ein Beitrag zur Ideologie der völkischen Nationalisten*. Hamburg: Institut für Asienkunde, Reihe Mitteilungen, Bd. 91, 1977 および教授資格論文の *Gewerkschaften in der japanischen Politik von 1970 bis 1990. Der dritte Partner?* Opladen/Wiesbaden: Westdeutscher Verlag, 1997 が重要である。最近では、ナショナリズムとデモクラシーに関する仕事を続行されている。ベルリンの日独センターとも協力したシンポジウムの記録に接した会員の方もおられると思う。すでに同じハイデルベルクの同僚シャモニー氏と仕上げられた丸山眞男『日本の思想』の訳 *Denken in Japan* は名訳として知られている。日本ドイツ学会は、その発足の当初から、ドイツの日本学との対話や交流もプログラムとして掲げていることもあるので、書評論文の形で、このザイフェルト氏の翻訳について気がついたいくつかのことを三点に分けて、以下に述べてみたい。

第一は、この翻訳の基本にあると想定される——訳者ご本人がどう考えておられるかは別として——いわば「翻訳の哲学」である。第二は、一般に「誤訳」と呼ばれているものについての小生なりの考えを例を挙げながら述べてみたい。第三は、翻訳には避けられない解釈学的ずれである。石田氏の原著そのものが、多少なりともこの問題に触れていることも、これを論じる理由である。そしてヨーロッパ以外の知的議論をヨーロッパに「紹介」することの意義についても触れておきたい。

(1) Der Sinn muß rüber.

1987年、同じハイデルベルクにある通訳学部の教授であったハンス・フェルメール氏は、翻訳と通訳についての東京ドイツ文化センター主催のシンポジウムの際に、ご自身が唱える *translatorisches Handeln* の核心として、*Der Sinn muß rüber.* と議論の果てに一言述べられたが、この表現は、今でも忘れられない。要するに語義的にどんなに正確であろうと、構文をどんなに緻密に再現しようと、メインのメッセージが伝わなければ、なんにもならない、ということであった。もちろん、この考えは聖書のような教典の翻訳には通じないかもしれない。その場合には「翻訳者の課題」でベンヤミンの言う *interlineare Übersetzung* が、つまり語順も変えないで行間に原義を書き込んで行く翻訳がいいのかもしれない。お経の多くは、意味不明の漢字をサンスクリットの原文にかぶせたものも多い。ベンヤミンが考えていたのは、ヘルダーリンによる『アンティゴネ』の翻訳である。小説や詩の場合にも

さまざまな考えがありうる。だが、実際にはフェルメール氏の言うとおりで *Guten Morgen!* を「よい朝を」と訳した方がいい場合は、きわめて稀であろう。

フェルメール氏の考えはつきつめれば、ガーダマーが主著『真理と方法』のある箇所で開催している翻訳論と収斂する。原文そのものが常に多義的である以上、翻訳者はさまざまな可能な意味のひとつに限定して翻訳しなければならないとガーダマーは言う⁽¹⁾。もちろん、そうやって出来上がった訳文は、当然のことながらさまざまな読者と、後のさまざまな時代の地平の中で新たな多義性を獲得するであろう。しかし、訳者は、多義的な意味のひとつに自分の文章を凝集させる必要がある、というものである。言い方を変えれば(このガーダマーの議論そのものが解釈の対象となるが)、翻訳は原文よりも分かりやすくなければならぬ、ということである。

わかりやすさ、意味が伝わるのが翻訳の骨子であるとするこうした考えこそ、ザイフェルト氏の訳業の基本にある「哲学」であると思われる。

実際に上に引いた例が示しているように、ザイフェルト氏の翻訳は、まずは文章がきわめて分かりやすく、読みやすい。正直言って、原著者のお世辞にも名文とは言えない、それこそ「日本の社会科学」独特の文体よりも、全体としてドイツ語の翻訳の方が読みやすかった。少なくとも主観的には早く(客観的には「早さ」に関しては小生の思い込みだろうが)、またすんなりと読めた。それは、例に見られるように、文章をほどき、砕き、説明的挿入をそれとなく入れるというさまざまな工夫のゆえであろう。ひとつの思考の単位と文章のリズムが合っていることも大きい。例えば上の例に見られる *weil* は、それ以前とそれ以後でふたつの息に分けて読める。後ろから前にもう一度戻って読むような漢文訓読型の手続きがいっさいいらぬ。

一般に日本語への西欧の学術的著作の翻訳は、一目見ただけで翻訳と分かる文体になるが、先にお見せしたドイツ語の場合は、私のバージョンを除けば、その度合いはかなり薄い。いや、ほとんどない。この当たり前のことが、どうして日本語への翻訳では実現していないのか、なんといっても不思議である。私のバージョンは、これまで日本でドイツ語の堅い文章を訳すときの流儀を意識的に逆転用してみたものである。われわれがしてきたことへの批判的反省の契機ともなるが—これについてはまたあとで論じる—その背後にあるのは、「逐語訳の精神」であり、学校文法で習った構文の純朴なる実体化である。cannot too +inf. は「しすぎてもしすぎることはない」に決まっているのである。だが、残念ながら「逐語訳の精神からの誤訳の誕生」いや、「悲劇の誕生」を論じなければならないことがあまりにも多い⁽²⁾。

(1) Hans-Georg Gadamer, *Wahrheit und Methode*, 2. Auf. Tübingen, 1965, S. 362ff. ガーダマーは明確に次のように述べる。Übersetzung ist wie jede Auslegung eine Überhellung... Er (der Übersetzer, K. M.) muß Farbe bekennen. a.a.O., S. 363.

(2) こうした問題についての好著として鈴木直『輸入学問の功罪——この翻訳分かります

ドイツ語として自然に読めるためにはしかし、長文の解体と再組み合わせ以外に、ザイフェルト氏によるさまざまな工夫がなされている。

なんといっても重要なのは、訳語の不統一性である。不統一性？心配ご無用。この「不統一性」は誤植ではない。もういちど確認しておきたいが、統一性の反対である。小生も、ドイツの哲学や社会思想の著作をずいぶん日本語に訳して来たが、その度に編集者及び校正係と訳語の統一性をめぐっての戦いがなされた。Alltag があるところで「日常」、別のところで「日常生活」「日々の暮らし」等としようものなら、また Regel があるところで「規則」、別のところで「規定」、ときには「規制」としようものなら、ゲラには校正者の統一願望を示す鉛筆が入っている。俗にいう「統一教会」の目は厳しい。ところが、ザイフェルト氏の翻訳を見ると「思想」の一語をとっても、コンテクストに応じてあるときは Denken, あるときは Ideen, あるときは, Ideologie などなどと、さまざまに訳し分けられている。「イデオロギーの終焉ではなく、思想の終焉」(220, 本論冒頭の引用も含めて日本語の引用の直後の数字は原著の、ドイツ語の引用の直後のそれは、翻訳のページ数をそれぞれ表す。以下同じ)は、Ende des Denkens (317)、共産党取り締まりの厳しい時代の当局の用語であった「危険思想の中核」(106)は Hort gefährlicher Ideen (159)、「思想問題」(106)は Weltanschauungsproblem (159) という具合である。「民衆」もあるときは Masse, あるときは, Volk, しかし「民衆的傾向に適應する政治」(75)は Eine Politik, die der wachsenden Bedeutung der einfachen Leute Rechnung trägt (116) というように、文字通り融通無碍、自由自在ですばらしい。「知識人」「知識層」については、Intelligenz と Intellektuelle の訳し分けがコンテクストに沿って意識的になされているのかどうか、多少疑わしく異議があるところもあるが、この辺りは文字通り「解釈」の問題である。「インテリ」の語が日本ですでに一部誤解を伴って使われてきただけに、無理もない。今日でも Er ist intelligent. を「彼はインテリだ」と訳して平気な顔をしている人がいるぐらいであるから⁽³⁾。

いずれにしても「統一教会」が見たら真っ青だろう。いまだにヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のタイトルの「精神」と同書の最後

か?』(筑摩書房, 2007年)を挙げておきたい。市場における競争がいい翻訳には必要であるというサブテーゼには賛成しがたいが、それ以外は明治以来の翻訳の宿弊を見事に描いている。

(3) 最近もハーバーマスの翻訳の一カ所にぎょっとした。戦後のケインズ主義の成功が論じられている箇所に「高い要求を持つインテリ層の国民の要望を満足させるために」(ユルゲン・ハーバーマス『他者の受容』法政大学出版局 (146頁)とあるが、原文は、um die Aspiration einer anspruchsvollen und intelligenten Bevölkerung zu befriedigen. (Jürgen Habermas, *Die Einbeziehung des Anderen*, Frankfurt A. M., 1999, S. 147) であって、「有能で要求度の高い国民」ぐらいの意味である。「インテリ層」だけの満足をケインズ主義がめざしたわけがない。

の数行を飾る有名な「精神なき専門人」の「精神」を同じ言葉で訳したためらわないのが、この国の翻訳文化である。「専門人」などというのは、とんでもない日本語であることはさておいても、「だって両方とも Geist でしょ」と平気で言っているのだから。最初の Geist は、これはもちろん解釈だが「メンタリティ、考え方、志操」などという意味であり、あとの Geist は、「深さ」や「内面」よりもむしろ、「普遍化能力」「価値重視」「理想にしたがう」などの意味であろう。いずれにしてもヘーゲルの「精神」とはまったく異なる。もちろん、ヴェーバー自身が、少なくとも本のタイトルの方は plakativ に表現しているのだから、「精神」と訳してもいいかもしれないが、あとの方はいかがなものか。「自分の分野を超えて全体を見ることの出来ない専門家」でいいのではなかろうか。

さらにザイフェルト氏は、日本の読者なら特に説明のいらぬ箇所、ドイツの読者のための工夫をしている。例えば、本文中への説明の組み込みである。原著 127 ページに昭和初期の危機感に見合った風俗現象として「三原山の自殺ブーム」が出てくる。戦後の熱海の「錦が浦」と同じように今では若い日本人にも意味が分からないところである。「たしかに危機感の背後には、三原山の自殺ブーム……に象徴される不安があった」というその箇所はこう訳されている。Sicherlich wurde die Gesellschaft überall von einer großen Unruhe erfasst, die sich etwa in der Welle von Selbstmorden am Mihara-Berg-einem von den Verzweifelten bevorzugten Ort für den Sprung in den Tod-ausdrückte. (189)。気がつくことは、「三原山」についての解説を、煩わしい注にしないで、それとなく文章のなかに組み込んでいることである。ドイツ語の専門書を日本語に訳すときに、われわれがこういうことをしたら、待っているのはお仕置きか、いや、もっと恐ろしいのは陰口である。

もちろん注にするか、本文の中に原著にはない文章を入れ込むかの判断は難しい。例えば、このすぐ直後に出てくる「エロ・グロ・ナンセンスから抜け出そうと」という箇所は、die Stimmung der Ungewißheit und der “Erotik, Grotteske, und des Nonsens (ero guro nansensu-ein um 1930 verbreiteter Ausdruck in den Feuilletons, d. Übers.) abzuschütteln,... (189) と言う具合に、「訳者注」であることが明記されている。あるいは、水俣病のチツソにおける「第二組合」の話が出て来るところでは (237)、脚注として、この日本独特の用語について詳しく説明がなされている (335)。

本文中にそれとなく挿入した説明、「訳者注」と明記した上での同じく本文中への挿入、脚注としてより詳しい説明——この三つの可能性のどれにするかの決定基準は、ザイフェルト氏にあっても、必ずしも一定していないようであるが、そこに「統一教会」のイデオロギーを持ち出すのは、けちくさい教師根性であろう。要は Der Sinn muß über. である。ただ、若干不適切と思われるところもある。

例えば原著者石田雄氏が昭和研究会のメンバーを挙げた次のような文章がある。

「常任委員は次の通りであった。大蔵公望，唐沢俊樹，賀屋興宣，後藤文夫，後藤隆之助，佐々弘雄，高橋亀吉，田島道治，東畑精一，那須皓，野崎龍七，松井春生，山崎靖純，蟬山政道。のちに三木清，矢部貞治，笠信太郎などが加わった」(137)。著者は，後藤隆之助，三木清，笠信太郎以外は読みをルビとして振っているが，煩雑なので省略した)。翻訳としては，人名の読みをローマ字で記せばいいだけの，最も簡単な箇所に見えるが，訳文を挙げてみよう。

Seine ständigen Mitglieder waren: der Oberhausabgeordnete Ôkura Kinmochi (1882 – 1962), der Innenpolitiker Karasawa Toshiki (1889–1967 sic.), der Politiker und Finanzminister Kaya Okinori (1889–1977), der Ministerialbeamte Gotô Fumio (1884–1980), der bereits erwähnte Gotô Ryûnosuke, der Jurist und politische Publizist Sasa Hiroo (1897–1948), der Wirtschaftspublizist Takahashi Kamekichi (1894–1977), der Bankier, Direktor des Kaiserlichen Haushalts und spätere Sony-Präsident Tajima Michiji (1885–1968), der Agrarökonom Tôbata Seiichi (1899–1983)...(204)

「人名については分かったかぎりでは生没年を記し，人物の性格づけもしておいた」という「凡例」の注記のとおり，生没年や社会的位置の説明を入れることによって無表情な名前の羅列にアクセントが付き，ドイツの読者にとっての情報価値も増すのはとてもいいことであろう（日本の読者なら，少なくとも原著が出た時点では，半分以上の人名について一定のイメージを持っていたはずである）。ただ，例えば田島道治に「後のソニー会長」としたのなどは，適切だったかどうか？もしも，戦前の支配階層と戦後の上層との「闇の連続性」を示唆するつもりならば，賀屋興宣に「後のA級戦犯，CIA協力者」とすべきかもしれない。あるいは，そこまで「きめつける」のはまずいかもしれない。それなら，田島については，ソニーの部分は削除すべきかもしれない。細かいことだが，重要なファクターと思われる。昔，サイデンスティックによる谷崎潤一郎の『細雪』の翻訳で，東京の「麻布」や「大森」といった重要な地名を省略しているのに激怒したことがある。アメリカの読者には東京の地理などどうでもいいということなのだろう。激怒は大人げなかったが，昭和初期の東京の生活を，そして登場人物の社会的位置を表すのに重要な記号である。「大森に一軒見つけた」は he had chosen the house. ではあまりに無惨である⁽⁴⁾。それに対して，ここでのザイフェルト氏の本文内注釈は「あまりに丁寧」「少しやりすぎ」と言わねばならない。

(2) 論旨の誤訳とささいな誤訳

非常に優れた訳文からなる本書にも誤訳はある。だが，気がつきたいいくつかの誤

(4) 谷崎潤一郎『細雪(上)』新潮文庫版，176頁。Junichirô Tanizaki, *The Makioka Sisters*. Translated by Edward G. Seidensticker, Tuttle Publishing, S. 103.

訳をあげつらう「意地悪」の前に、膝を打って感心した訳文をお目にかけてたい。

原著の白眉は、昭和十年代に優秀な社会学者たちが民族論に溺れ込んで行くプロセスの描写と分析である。「講座派」の社会学者だったはずの平野義太郎は、やがて「和敬の道徳」に「大アジア主義の歴史的基礎」を見るようになった。社会学の創始者の一人とも言うべき高田保馬は、「階級」から「民族」への重心移動を説いた。蠟山政道も「国民共同体」や「東亜共同体」を喧伝するようになった。そして彼らは誰も戦後あまり責任を問われなかった。蠟山はお茶の水女子大の学長も務め、いったん教職を解かれた高田保馬も阪大教授を70過ぎまで務め、1964年には文化功労者にも選ばれている。こうした昭和研究会系の「参与する社会学者」を扱ったこの第五章第二節はこう結ばれる。「この悲惨さには、日本の社会学者の一人として眼をおおいたくなる気持ちを禁ずることができないが、われわれはこの前例を直視して反省の資としなければならない」(原著148ページ)。

さて、この文章をザイフェルト氏はどう訳しているであろうか。

Angesichts eines solch erbärmlichen Resultats möchte ich mich als japanischer Sozialwissenschaftler am liebsten davon distanzieren. Doch es gilt, diesen Präzedenzfällen ins Auge sehen: Sie sind der Stoff zum Nachdenken für uns Heutige. (218)

最初の文章はもっといい翻訳があるかもしれない。しかし、最後の締めは、非常に良く考えられていて、感嘆おくあたわざるところがある。簡潔な中に含蓄が込められていて、いささか oberlehrerhaft な原文より見事である。

もうひとつ例をあげよう。「社会科学の『客観性』をいう場合、価値的前提、あるいは社会学者個人の価値選択の問題は、しばしば軽視されるか、あるいは敵視されさえする」(220)

Wenn man von der Objektivität der Sozialwissenschaft spricht, wird manchmal die Frage der Wertprämissen und der Wertewahl der einzelnen Sozialwissenschaften übersehen, oder man setzt sich sogar bewusst von solchen Überlegungen ab. (315f.)

首を傾げる方もいらっしゃるかもしれない。「敵視」はもっと別の表現もある、という意見の方もおられるであろう。しかし、私は明解な文章と、なによりも sogar bewusst の使い方に—— native speaker ならなんでもないことなのかもしれないが——舌を巻いた。

また福本イズムで有名な福本和夫のアクロバットそのもの、あるいは術学的以外のなにものでもない日本語「過程を過程する」(114、一時の廣松渉と同じでこのようなよく考えれば意味のない表現で福本は一世を風靡した)を prozesshaftes Darstellen von Prozessen (170)と訳したのは、まさに「著者よりもよく理解する」という解釈学のひとつの目標を見事に達成したと言わねばならない。あるいは、南原繁(当時東大総長)をその全面講和論のゆえに吉田茂首相が罵った有名な言葉「曲学阿世の

徒」(172)は、Wahrheitsverdreher und Speichellecker (251)といった具合で、細部まで見れば感心するところばかりである。

もちろん、誤訳やケアレス・ミスは散見する。例えば、明治30年に生まれた社会政策学会と社会民主党の関係を示す象徴的な文章の一節である。つまり、明治34年5月社会民主党が結成され、即日禁止となると、社会政策学会は、自分たちにも害が及ばぬように、社会民主党と距離を取る。そのことを舌鋒鋭く批判した河上肇の文章の引用がある。「社会主義を奉ぜる諸士が一党を組織し、名けて民主社会党といひ、稍々天下の耳目を惹くや、社会政策学会は倉惶として、いっぺんの趣意書を配布し……」(55。最初の「ママ」は三島、あとの「ママ」は石田による)。要するに「危険思想」と一緒にされるのをいやがった社会政策学会を非難する文章である。この肝心の箇所は verfaßte der Verein für Sozialpolitik lediglich eine Darstellung seiner Ziele... (87)となっていて、肝心の「倉惶として」が抜けている。überstürztとか hastigとかいった表現が入っていれば、社会政策学会の体質を糾弾する河上の文体がもっと生きたであろう。少し重箱の隅をほじくるようだが、ここはそれなりに重要な箇所と思う。

あるいは、吉野作造や福田徳三、新渡戸稲造らを中心として1918年12月に結成された、大正デモクラシーの申し子のような黎明会が発した文章にも若干の誤解がある。「黎明会会員は各自口に筆に与へられた限りの力を揮ひ、『思想は思想を以つてのみ戦ふべし』といふ心情に立脚し、一に言論を以て終始する愛国的プロパガンダを続行して、国家を危うする恐れある凡ゆる頑迷思想に対して挑戦し、之に打ち勝たずんば止まざらんことを期するものである」(85)。肝心の箇所の訳は、Die Gruppe stellt sich mit den Mitteln der öffentlichen Meinung gegen jegliches gefährliche und eifernde Denken, das ständig nur patriotische Propaganda betreibt und von dem zu befürchten steht, daß es den Staat in Gefahr bringt; sie ist bestrebt... (129)。黎明会といえども自らが「愛国的」であることを強調せざるを得ないことがわかる日本語であるが、翻訳では、「愛国的プロパガンダ」は頑迷な右翼の仕業になっている。

あるいは、「首相、陸相、内相を兼ね、大政翼賛会をもおさえ、後には軍需相、参謀総長まで兼ねた東条英機」(135)の「大政翼賛会をもおさえ」は Tōjō ... drängte den Einfluß der Vereinigung zur Unterstützung der Kaiserlichen Herrschaft zurück... となっている(200)。ここでの「おさえ」は、「手中に収め」「事実上個人的支配下におき」といった意味合いだから、zurückdrängenではないであろう。

公害問題などと社会科学との関係がいささか情動的に論じられている最終部に次のような文章がある。「『市民』や『住民』運動の提起する問題は、その運動に実際にかかわるかどうかを別にして、常に社会学者への問いかけとしてうけとられな

なければならない」(220)。この箇所のドイツ語訳は以下のようなものである。Die von Bürgerbewegungen und Bürgerinitiativen gestellten Themen müssen unabhängig davon, wer sie in die Diskussion gebracht hat, als Herausforderung für Sozialwissenschaftler begriffen werden. (315)。日本の社会学者の一部に典型的な心情倫理的な「運動にかかわる」という表現が翻訳にとっての Stolperstein になっている。同じことは住民運動でよく使われた「大衆の生活実感」(205 高島通敏からの引用)にもあてはまる。Lebenswirklichkeit der Massen (297) と訳されているが、それこそ「実感」では、いささか daneben の感じがする。問題は「大衆」が日常生活でどのように感じているか、その Wahrnehmung であるから、real wahrgenommene Lebenswirklichkeit とか reale Wahrnehmung を使うか、あるいは Wahrnehmung des realen Lebens などとするか、要するに「主観的」感覚だが、現実の構成要素として無視できない、無視してはならないという normativ なニュアンスが必要である(5)。

いささか瑕瑾をあげつらいすぎたかもしれない。先の比喩を繰り返せば、重箱の隅をほじくるとは、まさにこのことかもしれない。なぜなら、これまで挙げた例は、基本的に Argument に関わるものではないからである。誤訳として糾弾すべきはまさに Argument の取り違いである。

論点をはっきりさせるために、最近お目にかかった Argument の取り違いの例を二つほど挙げておこう。ひとつは、ハーバーマスの『ポスト形而上学的思考』(下の注にある既訳のタイトルとは意識的に別のタイトルにした)からである。著者ハーバーマスはローティやリオタールの科学論で公然と唱えられている相対主義を批判して次のように書いている。Damit wird auch noch die schwächste der Kantischen Vernunftideen eingezogen. 訳文は「これによってカントの理性理念の最大の弱点すらも回収される」となっている(6)。これではなにがなんだかわからない。大体が「弱点」ではなく、ここは、カントの理性概念の最もおとなしい部分を意味している。「強い根拠づけ」と「弱い根拠づけ」というこの数十年の科学論の表現も下敷きになっている。したがって意味は、「これでは、カントが最も控えめに論じるときの理性ですら、無意味なものとされてしまう」ということである。einziehen はここでは「回収」ではなく「撤回」「取り消し」のニュアンスである。まったく議論が捉えられていない、このような翻訳を読んで、分からないのを自分の頭のせい

(5) 冒頭に名前を挙げたシャモーニ氏から Alltagserfahrung ではどうか、と連絡をいただいた。これが一番いいかもしれない。

(6) ユルゲン・ハーバーマス『ポスト形而上学思想』(未来社、1990年)212頁。Jürgen Habermas, *Nachmetaphysisches Denken*, Frankfurt, 1988, S. 173. この翻訳にはこのような取り違いが、ほぼ2～3ページに1カ所のペースである。

と思う読者は本当にお気の毒である。「逐語訳の精神からの悲劇の誕生」である。

あるいは、もっと重要なところでは、先にも触れた『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のあの押しも押されもしない大塚久雄の翻訳である。そこでは gewiß,„aber の論脈がほとんど意識的としか思えないかたちで無視されている。「ピュウリタニズムの生活理想が、ピュウリタン自身も熟知していたように、富の『誘惑』のあまりにも強大な試練に対してまったく無力だったことは確実である」(岩波文庫版、351頁)⁽⁷⁾。ここは、「確かに……無力だったにはちがいない」と訳すべきである。というのも、そのだいたい先に aber とあって、実は、富の誘惑というどこでもある現象が問題なのではなく、富の増大を gutes Gewissen と結びつけたことが資本主義的労働「倫理」の驚くべき要諦なのである、という議論が続くからである。大塚は、ここをキリスト者としての自分の「まじめな」倫理に合わせて勝手に解釈してしまった⁽⁸⁾。この箇所でも、実はザイフェルト氏のように、「裁断と再縫い合わせによる論旨の伝達」という方針で訳していれば、訳者大塚久雄も自ら齟齬に気づいたかもしれない。「悲劇の誕生」は避けられただろう。

さて、ザイフェルト氏の翻訳にこのような論旨の取り違い、論脈の大きなずれ、著者の主張が誤解されたり、不分明になったりするほどのずれがあるかと言えば、筆者が見たかぎりには存在しなかった。もちろん、筆者は最初から最後まで逐一検討できたわけではない。5ページほどドイツ語を読み、続いて日本語をその分だけ読む、あるいは言語の順番をその逆にして進むというやり方であるから見落としもあるだろうが、論旨は割合と記憶に残るものでもある。むしろ、マルクス主義が日本の社会科学にもたらした衝撃と、その問題点を論じている第四章第三節などは、原文よりも遙かによく筆者の頭にはいつてきた。

とはいえ、筆者の気づかなかったところに大ミスがあった。ザイフェルト氏本人から、「同僚のシャモーニ氏に指摘された、まづい」というコメントつきで連絡があったのが、福本和夫の自伝のタイトル『革命は楽しからずや』(121)の訳である。Revolution ist kein Vergnügen となっていた⁽⁹⁾。昔なら「革命亦楽しからず乎」と

(7) 原文は、Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Tübingen, 1947, S. 195. この箇所の誤訳の指摘は次註にあるように、中野敏男氏の指摘による。

(8) 実は単なる「勝手」ではなく、生産力増大のための経済倫理という戦時中のいささか怪しげな議論が大塚が絡めとられており、戦後もその点は大きく変わっていないことを、この箇所を使って中野敏男は精密に論証している。誤訳も、思想のかなり本質的な無意識部分を露呈していることになる。中野敏男『大塚久男と丸山眞男』(青土社、2001年。30-32頁及び81-88頁)。なおこの箇所については大分前だが岩崎英二郎氏にも御教示をたまわった。

(9) こぶし書房版(2003年)をこの書評のために図書館で借りて読んでみたが、1894年(明治27年)生まれという世代のゆえであろう、福本の漢学の素養は相当なもの。もはやわれわれの世代には失われている。あの時代の学生生活や知識人のあり方を彷彿とさせてくれる本である。獄中期も重要。ただ全体は、夜郎自大という言葉はこのためにあるような本だった。

書いたであろうこのタイトルは反語的表現なので、正しい訳はもちろん *Ist die Revolution nicht ein Vergnügen?* (178) であろう⁽¹⁰⁾。まったく逆になっているのは、ちょっと弁護できない。「翻訳亦危なからずや」である。とはいえ、タイトルにすぎないから、論旨の取り違えとまでは言えまい。

(3) hermeneutische Verschiebung と翻訳の意義

与えられたスペースを越しているので、手短にしたい。最近の文化学で *traveling theories* がよく論じられるが、その際に強調されるのは、どんな理論モデルも、思想も、別の言語や文化圏に移行すると必ず変容を蒙るということである⁽¹¹⁾。原著のひとつのテーマでもある。例えば、明治憲法とともに日本の指導層は、ドイツ型の国家体制を選択したとよく言われるが、実はそこに変容ないしずれがあることを著者の石田雄は見逃していない。すでに明治憲法第一条にしてからずれがある。ヘルマン・レスラーの提案は *Das Kaisertum Japans ist eine auf ewig unteilbare Erbmonarchie* というものであり、天皇の背景にある宗教的・神話的要素を排除して、純粋に国法学上のいわば「定義」を表現していた。それに満足しない日本側は、「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇ヲ統治ス」と、当時のドイツ国法学では不必要な内容的要素「万世一系」が入っている⁽¹⁸⁾。その後の憲法以外の法体系の整備でも、ドイツ国法学といえども多少は継承している1848年の3月革命の自由主義的な遺産は無視され、国家の実体的側面だけが「国家学」の名の下に強調されるようになったと著者は両者のずれを重視している⁽⁴⁰⁾。さらには、日本におけるドイツ学受容の不毛性があちこちで行間に暗示されている。

ドイツ語版につけた *Postskriptum zur deutschen Ausgabe* においても、元々が比較の意図を秘めて書かれた本であることが強調されている。そして、こうした日独の違いが特に戦後の日独社会における議論風土の違いに照準を絞って論じられている。

これまでの翻訳論の多くは、こうした政治的社会的背景のもとづくずれではなく、多くの場合翻訳に伴う言語上の困難が議論されていた。用語の翻訳についての古典的な著作である柳父章の『翻訳語成立事情』(岩波新書, 1982年)などは、その典型

- (10) ここもシャモニー氏から、どうせ論語の出典はドイツ人の読者には無縁だから「もっとくだけて」*Revolution macht Spaß!* でいいのではないかと提案をいただいた。感謝したい。
- (11) Rebekka Habermas/ Rebekka Mallinckrodt, *Interkultureller Transfer und nationaler Eigensinn*, Göttingen, 2004, S. 12: "Interkultureller Theorie- und Kulturtransfer führt im Regelfall nicht zur schlichten Weitergabe von Wissenssystemen... Das liegt ...vor allem daran, daß kultureller Transfer im besten Sinne immer ein produktives Mißverständnis ist"
- (12) 本書は、「近代」ひとつをとっても、西欧内部の多様性を見ていない。ボードレールを論じるベンヤミンにとっては「近代」は「地獄」であったが、ハーバーマスにとっては「未

である⁽¹²⁾。それに対して石田雄は、最後に結論的にこう論じる。「日本の社会科学の欠陥は、社会科学理論の西欧からの摂取と、それに伴う言語の二重構造という事実にあるのではなく、むしろそのもたらす問題を意識せず、その条件を積極的に活用できなかった主体的条件にあると言わなければならない」(234)。石田雄はここまで、西欧における学問的概念と日常語の近さと、日本における接ぎ木的な専門用語のあり方を対比的に論じていた。その意味では、これまでの識者がしばしば行ってきたやり方を踏襲していた。だが、結論的にはそうした語学屋的文化対比論の発想を越えて、ずれと変容が持つ構造的可能性とそれを意識しないことによる破綻が問題とされている。

西欧のパラダイムを別の文化が受け入れた場合、そこには別の知が発生する。表現の仕方も概念構成も異なってくる。それは決して西欧より劣ったものではない。しかし、ずれは自覚されねばならない。逆に「西欧中心主義」への単純な批判は、かつての「ブルジョア性」への批判と同じように不毛である。規範的な問題は共通する。そうしたことを意識させるこうした著作がドイツ語に訳されたことの意義はきわめて大きい。

現実に shared modernity (Geteilte Moderne) が好んで論じられ、multiple modernities (Vielfalt der Modernisierungswege) が流行語にもなり、両者を踏まえて、entangled modernities (Shalini Randeria, Michael Werner, Benedicte Zimmermann) が論じられる時代である。そうした時代にもかかわらず、ヨーロッパ、アメリカ以外の地域で、western challenge に遭遇して以降、複雑で錯綜した議論がそれぞれ展開してきていることは、ヨーロッパの一般の知識層には想像がつかないようである。そうしたことについての知は多くの場合、日本学者や中国学者のような地域研究者の枠内にとどまっている。しかも、ヨーロッパの地域研究者による整理でなく、「現地」のディスクルスを直接に知ることは、一般のヨーロッパの読者層にはなかなか難しい。その点で、裏表紙の宣伝テキスト(ズールカンプ社の編集者が書いたそうであるが)にある Geschichte einer frühen Globalisierung というのは正しい。本書は、ドイツの日本学者のためではなく(彼らは日本語の「原書」を読めばいい)、ドイツの社会科学者のために訳されたと言える。

例えば、ドイツの全国紙などには、Blick in die ausländischen Zeitschriften のような記事が定期的に掲載されている。読者はそれを通じてフランスやアメリカの知的議論のエッセンスを知ることが出来る。だが、残念ながらイタリアやポーランドについての報告はほとんどない。ましてやアジア諸国の内部の知的議論の紹介は皆

完のプロジェクト」である。「近代」という用語についてはもっとすぐれた業績がある。例えば、ウォルフガング・シャモーニ『「近代」翻訳考』(上下)、『丸山眞男手帖』30(2004.7) / 31(2004.10)

無にひとしい。しかし、グローバル化の現在、個々の地域や文化内部でのディスクルスについての知識とその相互翻訳こそ重要である。その意味でザイフェルト氏が Die HIESIGEN (「ここの人々」あるいは「ヒージヒ族」?) と呼ぶ、ドイツの社会学者たちがこのような議論を知るきっかけとして、読んでいて「翻訳亦楽しからず乎」と言いたくなる、このような翻訳の意義はまことに大きい。

もちろん、自分たちの世界の議論の伝統をまとめたこの著作のドイツ語翻訳を読むわれわれも Die HIESIGEN であることを忘れてはならない。数年前の国際美学会で、ヘーゲル美学について発表した韓国の専門家に、「なぜ韓国でヘーゲルなのですか?」と見下すように質問した日本の有名教授の例はその事態を雄弁に物語っている。われわれは、韓国の、中国の、あるいはフィリピンの、そしてインドの内部的知的ディスクルスについて何を知っているであろうか。個人では限界がある。必要なのは、公共の場での知的ディスクルスの「交流」「翻訳」「遭遇」のある種の制度化であろう。そうした意味での「公共圏の国際化」はまだ起きていない⁽¹³⁾。その方向に向けた一歩として、長年の労苦の結実であるこの翻訳の誕生を喜びたい。同時に、今後もこうした仕事が続くように、あちこちで「翻訳を読むのも亦楽しからず乎」という声が出て来るように、購入というかたちでの「援助」が起きるといいと思う。

(13) ハーバーマースでも、近著の最後に ein kurzes Postskriptum としてこの問題をほんの少々取り上げているにすぎない。注の形ではあるが、日本の例も引かれている。しかし、ヨーロッパ内部での公共圏の「トランスナショナル化」の模索が中心であることに変わりはない。それすら不十分なのが現状である。Jürgen Habermas, Hat die Demokratie noch eine epistemische Dimension? Empirische Forschung und normative Theorie. In: Jürgen Habermas, *Ach, Europa*, S. 138-191, 公共圏の「トランスナショナル化」の問題は S. 188-191.